アルテス　リベラレス　（岩手大学人文社会科学部紀要）
第111号　2022年12月　49頁～62頁

フィリピン人講師によるオンライン英会話レッスンの受講動機：調査と考察

小　林　葉　子

要旨

本稿の目的は，「（白人）英語ネイティブ」志向が強いと言われる日本人英語学習者の間で，フィリピン人によるオンライン英会話レッスンが受け入れられた要因を調査することである。こうしたレッスンの受講生100名に調査を行い，レッスン受講理由，英語学習目的，英語圏留学経験などについての質問項目に回答してもらった。文献調査に基づいた以下の仮説を検証するために数値データと自由記述を分析した：(1) 受講理由に経済的な制約が含まれるのか，(2) ネイティブ志向が（強く）ないのか，(3) フィリピン人講師を欧米圏出身の英語講師と同じように，またはそれ以上に評価しているのか，(4)「フィリピン英語」に対して否定的なイメージを持っていないのか。その結果，ネイティブ志向の持続，講師たちの「訛り」を気にする段階ではない初級英語学習者としての自覚，欧米圏出身の英語教師による割高のレッスンとの差別化，などが明らかとなった。こうした結果を踏まえ，フィリピン人英語講師たちによる格安のレッスンを授業に導入する際に生じる課題について考察し，教育的示唆として整理した。

研究背景

日本国内事情

日本や東アジアは英語のノンネイティブ話者が大多数を占める非英語圏であり，かつ，彼らの多くが「今の時代，英語は必要」という英語イデオロギーを信じている。そのため，例え日常的に英語を使う環境に置かれていない学生や社会人であっても，「いつかは使うはず」というイデオロギーに背中を押される形で，英語学習に投資する場合が多い。ただし，彼らの多くは「白人ネイティブ」イデオロギーの信仰者でもあり，特にアメリカ英語を唯一のモデル・目標とする（ように社会化される）。そうしたイデオロギーを生産する日本の英会話産業においても，これまで欧米英語圏出身の「英語ネイティブ」教師による対面レッスンが主流であった。その傾向に変化はないが，その一方で，非欧米英語圏出身，特にフィリピン人によるオンライン英会話レッスンを提供するビジネスも成長し続けており，市場の成長はそうしたビジネスサービスを享受する日本人英語学習者の数の増加を意味している。例えば，日本で最初にこのサービスを始め，東証一部上場企業でもあるレアジョブの場合，100万人以上の累計会員がいるという（ホームページ）。では，「白人ネイティブ」志向であるはずの日本人英語学習者が

欧米人ではないフィリピン人の英会話レッスンを受け入れるようになったのは何故か。どういう学習者がどういう動機でそうしたレッスンを受講しているのか。本稿の目的はこうしたかつてない英会話レッスン人気とネイティブ志向との関係を調査することである。なお，本稿は国際ジャーナルに掲載された英語論文（Kobayashi, 2021）を踏まえ，構成，考察，参考文献を含め，大幅に修正・加筆したものである。

まず第一に取り組む研究問題は，フィリピン人の英会話レッスン受講群と欧米英語圏出身の「英語ネイティブ」教師によるレッスン受講群が独立して存在しているのかどうか，という点である。つまり，フィリピン人の英会話レッスンを受講している人たちの多くは，そうしたレッスンのみを受講しており，欧米英語圏出身の「英語ネイティブ」教師によるレッスンを受講していないのかどうか，という疑問である。特に，経済的な理由から高価な「英語ネイティブ」教師によるレッスンをあきらめ，フィリピン人講師によるオンラインレッスンを選択している日本人英語学習者が増えているのだろうか。この点において，英会話業界もフィリピン人講師による英会話レッスンの安さを強調している（小張，2018；坂井，2018）。具体的には，最大手のレアジョブが提供する最も人気のプランは，25分の個人レッスンを毎日受講しても6,380円というものであり，１レッスンは206円となる。一方で，英会話業界大手のECCが提供する「ネイティブ」によるオンラインレッスンは月に８回のレッスンで31,680円かかり，25分レッスンあたり3,960円となる（2022年９月１日現在）。両レッスンの料金格差はほぼ20倍となる。「質より量」という考えの日本人英語学習者が増え，そのことがフィリピン人講師によるオンラインレッスン人気の背景にあるのだろうか。受講生の英会話レッスン受講歴を調べることで，彼らの受講動機をより良く理解することを目指す。

関連する第二の問いは，フィリピン人講師によるオンラインレッスン受講生たちが抱く「英語モデル」観についてである。上述したように，日本そして非英語圏に住む英語学習者の多くは「ネイティブ」英語をモデルとして見なしている。では，フィリピン人講師によるオンラインレッスン受講生たちにはそうした従来からの「英語ネイティブ」志向が（強く）ないのだろうか。それとも，「英語ネイティブ」志向を持っているものの，経済的な理由などから，そうではない講師によるレッスンに「妥協」しているのだろうか。

先行研究によると，英会話業界はフィリピン人講師を「ノンネイティブ」だと明言つつ，彼らによるレッスンの強味を強調しているという。例えば，小張（2018）によると，フィリピン人英語講師たちが「ノンネイティブ」であるからこそ，日本人英語学習者のような「ノンネイティブ学習者を理解し，より効果的に教えることができるという肯定的な側面を主張する」（29頁）という業界の戦略が功を奏している，という。そして，同じ「ノンネイティブ」であっても，フィリピン人講師の英語が「アメリカ英語のような英語」であり，「国際的な基準を兼ね備える言語モデルであることを印象づけ」るのだという（29頁）。坂井（2018）も同様に，オンライン英会話専門企業は，フィリピン人講師が「英語ネイティブスピーカー以上に英語講師としての資質を備えている」ことを強調する，としている（49頁）。確かに，レアジョブ同様にフィリピン人講師による英会話レッスンを専門に提供するQQ Englishのホームページには，全員が「国際資格TESOLの取得」者の「プロの教師」であり，「採用後も時間をかけトレーニング」を受けているため，「圧倒的なレッスン品質」を保証している，とある。ではフィリピン人講師による英会話レッスン受講生たちの英語モデルはそうした「ノンネイティブ」のフィリピン人講師なのだろうか。小張（2018）も坂井（2018）も，日本人英語学習者たちに対して調査を行っていないため，本調査では日本人英語学習者たちに対して調査を実施し，彼らの「英語モデル」観とフィリピン人講師によるオンラインレッスン受講動機の関係に

ついて調べることとした。

さらに関連する第三の問いは，「フィリピン人の話す英語」に関するイメージとフィリピン人講師によるオンラインレッスン受講動機の関係についてである。坂井（2018）は，フィリピン人による英語レッスンが日本人英語学習者に受け入れられた要因のひとつとして，「インド英語」と異なり，「フィリピン英語」という概念・用語が日本社会で浸透していないためだ，と指摘している（44頁）。つまり，インド人から英語を学ぶとなると「インド英語」という否定的なイメージが湧いてしまうが，フィリピン人から英語を学ぶ場合は「フィリピン英語」というイメージは湧かないため，業界側にとっても都合がいいのだという。長年，フィリピンにて日本人英語学習者の語学留学動向について調査をしてきた別の研究者も，フィリピンへの語学留学者たちの場合，「共通語としての英語を媒介とした英語教育であることを意識して留学する人はほとんどいない」と断言している（羽井佐，2016，８頁）。今回の調査では，回答者の記述データを分析することで，彼らが「フィリピン人（講師）の話す英語」にどのようなイメージや見方を持っているのか，そして，それがどのように・どの程度受講動機に関連しているのか，という点を調査する。

本調査と結果の報告をする前に，日本の英会話業界と契約してオンライン英会話講師として働いているフィリピン人たちの存在について，以下で整理したい。何故なら，英語を教えることが出来，かつ低賃金労働を厭わない若いフィリピン人たちが多くフィリピンに存在することこそが，彼らに特化したオンライン英会話業界の成立につながっているためである。

フィリピン国内事情

シンガポールやインド同様の歴史的背景から，フィリピンもいわゆる「準英語圏」（Outer Circle nations）に分類され，中間層以上の国民の間では英語が第二言語または第一言語として話されている。そしてインド同様にフィリピンでも所得と英語力が密接に関係している。国民の多くを占める低所得者層は英語のノンネイティブ話者である一方で，少数派の恵まれたエリート層は自宅・学校・職場で英語を第一言語として使う英語ネイティブ話者である（Tupas, 2019）。

さらに，国内の経済事情から，英語で教育を受け英語力が非常に高いエリート層である大学生の就職率の低さが大きな社会問題となっている。こうした事情から，インド同様に，外資系企業がフィリピンにもコールセンターを設置し，アメリカ英語を話す（ように再トレーニングされた）大学卒業生を大量に雇い，アメリカ国内の顧客対応に当たらせている（JETROマニラセンター 2006）。なお，フィリピンでのコールセンターエージェントの初任給はソフトフェア開発技術者よりも「若干低い」ものの，公立学校教職金よりも高いため，教員資格を持つ大卒者がコールセンターに就職するという「好ましくない影響」が見られるという（JETROマニラセンター 2006，７頁）。しかしアメリカ人の振りをしてアメリカ人顧客の苦情等に対応するコールセンターでの深夜業務は心理的・体力的な負担が大きい（Pal & Buzzanell, 2008）。それよりも，時差がほぼない状況で「フィリピン人」であることを隠さずに英語講師として働くことが出来る職業選択をする大卒生たちもいるであろう。ある語学学校の場合，半数以上の英語講師たちが元コールセンター勤務経験者であったという（Lee, 2021, 78頁）。

ただしもちろん，アメリカ人の振りが出来るほどのアメリカ英語力を持っておらず，コールセンター業務に就くことが出来ない大卒者たちが，東アジア人向けの英会話業務に流れている可能性もある。QQ Englishのホームページでは「創業者の想い」として，「フィリピンには経済的な問題も多く，働ける場所が少ないです。QQ Englishでは全ての先生を正社員で雇用し，

長く働ける環境を作っています。」とある（2022年９月１日現在）。

外国人向けの英語でのホスピタリティサービスを提供する外資系の企業にフィリピン人の若者が就職することを後押ししているのは，フィリピン政府である。政府による「コールセンター企業への投資優遇措置」（JETROマニラセンター 2006, ９頁）や外国人観光客誘致キャンペーン（“It is More Fun in the Philippines”；Olive, 2019）とともに，政府関係者が留学フェアなどでフィリピンへの英語留学を宣伝している（例：フィリピン政府観光省主催「フィリピン留学フェア2017」）。しかしながら，コールセンターにしても英会話業務にしても彼らにとって一時的な仕事であり，サービスを受ける先進国側からすると，かなりの低賃金でそうした業務を担っている。もちろん，ビジネス誘致を行っているのがフィリピン政府であり，就職難の大卒者に職を提供して喜ばれているのだから，先進国（民）は彼らに恩恵を与えている，という意見もあろう。しかし，英語教育に関わる者たちにとっては，英会話産業に関わる教員・スタッフの雇用状況への認識を深めることは大切であろう。本稿でも後半で，フィリピン人によるオンライン英会話サービスを英語学習者として享受すること，そしてそうしたサービスを英語教育者が奨励することについて考えたい。

本研究

参加者

民間の大手調査会社に委託し，フィリピン人講師のよるオンライン英会話レッスンを受講したことのある日本在住の100名（18-34歳）に対して，アンケート調査を実施し，データを収集した。なお，本調査の前に，同年齢層の500名に予備調査を実施し，その中でフィリピン人講師のよるオンライン英会話レッスン受講経験者がどの程度いるのか調べた。その結果，17.2%にあたる86名が受講経験者であった。この結果から，予算の点からオンライン英会話レッスン受講経験者を100名に絞ることは可能だと判断した。本調査の100名の中に，予備調査参加者は含まれていない。100名のうち，男性44名，女性55名；18-29歳が57名，30-34歳が43名である。大半のオンライン英会話受講期間は半年以下であった；１か月未満（20名），２か月未満（25名），半年未満（26名），１年未満（18名），２年未満（５名），２年以上（６名）。男女ともに大半が会社員である：フルタイマー（62名），パート（12名），主婦（10名），学生（16名）。

アンケート調査・分析

フィリピン人講師のよるオンライン英会話レッスン受講理由，英語学習目的，英語留学経験などについての質問項目に回答してもらった。分析は先行文献に基づいて導いた研究テーマの観点から行った。具体的には，(1) 受講理由に経済的な制約が含まれるのか，(2) ネイティブ志向が弱いのか，(3) フィリピン人英語講師をネイティブ英語講師と同じように，またはそれ以上に評価しているのか，(4)「フィリピン英語」という用語が使われるかどうか，という点について分析を行った。

結果

オンラインレッスン受講生の経済力

フィリピン人講師によるオンライン英会話受講者100名のうち，42名が欧米英語圏出身の「ネイティブ」講師による料金の高い英会話レッスンを受講したことがあった。さらに，64名が英語留学経験者であり，そのほとんどが欧米英語圏を選択している：アメリカ（34名），カナダ（21名），オーストラリア（18名），ニュージーランド（12名），イギリス（10名），フィリピン（10名）（いずれも複数回答）。また，「欧米英語圏出身の講師によるレッスンを受けたいが，料金が高いから」フィリピン人講師のオンライン英会話を受講している，と回答したひとは４名のみだった。なお，レッスン費用を自己負担している回答者は76名であり，親など保護者（13名），配偶者（10名），勤務先（７名），その他（１名）よりも，圧倒的に多かった。これらの結果から，フィリピン人講師によるオンライン英会話受講者の大半は，料金の高い欧米英語圏出身による英会話レッスンを経済的理由から断念しているのではないことがわかる。

オンラインレッスン受講生の英語学習目的

本調査の回答者に英語学習理由を尋ねたところ，男性回答者の場合「仕事で今必要だから」が55.6%と最も高く，次いで「仕事で将来必要だと思うから」が44.4％であった。女性回答者の場合，「仕事で将来必要だと思うから」と「海外旅行中に英語を使いたいから」が最も高く（30.9%），次いで「趣味・習い事として英語を学びたいから」が27.3.%であった。半数以上の男性回答者（55.6%）が受講理由として選んだ「仕事で今必要だから」という項目を選んだ女性回答者の割合は14.5%に留まっていた。本調査を準備していた段階では，こうした男女差を指摘するような研究や議論は存在しなかったため，男女差について詳しく追究するための質問項目は設定していなかった。もちろん，先行文献調査段階では，白人英語ネイティブ男性講師による英会話レッスンを自主的に受講する日本の若い女性に関する研究や議論，そしてそうした見方の国際的浸透については把握していた（小林, 2018を参照のこと）。しかし，女性たちが同じく「趣味」などの目的で，フィリピン人（女性たち）によるオンライン英会話を受講している可能性については，想定していなかった。彼らの受講動機に関しては，今後の調査の主要テーマとする必要があろう。

オンラインレッスン受講生の英語モデル観

フィリピン人講師によるオンライン英会話受講者のうち，講師たちを「英語のノンネイティブスピーカー」だと認識しているものたちは少数派であった（16名）。また，「講師たちが優秀で，授業の質が高いから」フィリピン人講師のオンライン英会話を受講している，と回答したひとは18名だった。つまり，フィリピン人講師たちによるオンラインレッスンを受講しているからといって，講師たちが「英語ネイティブスピーカー以上に英語講師としての資質を備えている」という業界が発信する宣伝文句（坂井，2018，48頁）を支持しているとは限らないことが伺えた。

また「フィリピン人講師の話す英語の発音や訛りについて気になったことはない」という項目に賛成した回答者は20名だった。つまり，多くの回答者たちは講師たちの発音や訛りに気づいていることになる。しかしながら，気になった・気づいた場合でも，自分たちは英語初級者であるという自覚があり，フィリピン人講師の「訛り」を気にすることをしない，する必要はない，という選択をしているようである：

○ *ネイティブスピーカーではないのでたまに訛りが気になることはあるが，自分のレベルでは気にならない*（33歳，フルタイム勤務女性，海外旅行目的で英会話学習，英語留学経験なし，オンラインレッスン半年以上受講）

○ *学習者には分からない訛りがあったとしても，より料金の安い方法で学べる機会があることは，学習者にとって貴重であり，ありがたい。*（33歳，主婦，趣味かつ海外旅行目的で英会話学習，フィリピン人と欧米圏出身の英語ネイティブ教師による英会話レッスンを同時に受講中）。

もし，フィリピン人英語講師が「英語ネイティブスピーカー以上に英語講師としての資質を備えている」（坂井，2018，48頁）と，日本人英語学習者が信じているのならば，フィリピン人英語講師によるレッスンが欧米圏出身の英語ネイティブ講師によるレッスンよりも格安であることに疑問を感じるはずである。しかし，上記の主婦の記述にあるように，受講生のほとんどはそうした疑問は感じていない。むしろ，フィリピン人講師の話す英語には「訛り」があり，ネイティブ講師との「スキルの差」やフィリピンの物価や人件費を考えると，彼らのレッスンが格安であることは「当然」，「妥当」，「仕方ない」と思っている：

○ 欧米英圏出身の講師の方が，本格的な英語の知識があるためフィリピン講師の方が格安なのは仕方ないと思っている。
○ 欧米の講師の方が発音がきちんとしているので人気になり，価格に差がつくのは普通だと思う。
○ フィリピン人の英語のイントネーションはクセがあるので安いのは当然だと思う。
○ 東南アジアのほうが，英会話に限らず安いイメージがあるので，感覚には合っている。
○ フィリピンの物価は安いので，普通だと思う。
○ 物価が違うので当然だと思う。

この結果からも，フィリピン人英語講師によるレッスンを受講しているからといって，そのレッスンやフィリピン人講師をネイティブ講師やそのレッスンより高く評価しているわけではなく，あくまでも初級学習者のための過渡的・補助的なレッスンとして位置づけ，利用している可能性が高い。

なお，フィリピン人講師によるオンライン英会話受講の理由を記述する際に，「フィリピン英語」という用語を使用している回答者は皆無であった。よって，少なくとも，こうした学習者たちは，フィリピン人講師の話す英語が「フィリピン英語」である，という認識はないのかもしれない。つまり，坂井（2018）が指摘するように，フィリピン人による英語レッスンが日本人英語学習者に受け入れられた要因のひとつとして，「インド英語」と異なり，「フィリピン英語」という概念・用語が日本社会で浸透していないためである（44頁），という可能性はある。ただ，上記に示したように，フィリピン人講師の話す英語には「訛り」がある，または欧米圏出身の英語講師と同じではないため，レッスン料金が格安でも「当然」という認識を持っている受講生は多い。そのため，フィリピン人（講師）の英語に対し，何らかの否定的なイメージを持っていることは伺える。

考察

フィリピン人による英語レッスン受講者たちはその格安レッスンを享受しているものの，欧米圏出身の英語ネイティブによるレッスン受講を経済的な理由から出来ないわけではなく，「英語ネイティブ」モデル志向から脱却しているわけでもない。実際，回答者の半数近くが，欧米圏出身の英語ネイティブによるレッスンを国内の英会話学校でも（42%），英語圏でも（64%）でも受講した経験があった。また，フィリピン人英語講師を欧米圏出身の英語ネイティブよりも高く，または同等に評価しているわけではない。むしろ，「ネイティブ英語」をより高いレベルとして認識し続けているからこそ，発音や訛りにおいて「ネイティブ英語」とは同一視出来ないフィリピン人によるレッスンが格安であることを「当然」だと思っている。そして，日本人英語学習者のネイティブ志向の強さを認識している英会話産業は，フィリピン人による英語レッスンが欧米英語圏出身の「ネイティブ」講師によるレッスンに取って代わることを目指してはいない。そうではなく，日本人英語学習者の選択肢を広め，より幅広い顧客を掘り起こし，より長期的に英会話に資金投資を続けるよう，新たな「英会話」商品開発を進めている。実際，欧米英語圏出身の「ネイティブ」講師によるレッスンのみを提供していた大手語学学校も，そうした対面・オンラインレッスンよりも安い料金設定でフィリピン人によるオンライン英語レッスンを提供し始めている（例：ECC）。なお，英会話産業が認識しているかどうか現時点では不明だが，顧客の中には「趣味・習い事」目的としてフィリピン人女性講師とのオンラインレッスンを受講する社会人女性たちの存在も少なくない。

初級英語学習者として（のまま）の日本人社会人の存在

本調査への回答者の多くが社会人であり，仕事での英語の必要性（の予想）を理由に英語学習をしているにも関わらず，相変わらず「ネイティブ英語」志向が強かった。日本企業にとってのビジネス相手は欧米英語圏出身者だけではなく，諸外国の取引先とのやり取りも頻繁なはずである。そうした職場事情にも関わらず，「ネイティブ英語」志向が強いということはどう理解すればいいのだろうか。ビジネス相手である欧米英語圏出身者だけではなく，非欧米圏出身のビジネスパーソンたちも「ネイティブ（ライクな）英語」を話しており，そのことが日本人ビジネスパーソンたちの英語モデル観に影響を与えているのだろうか。その可能性は十分にある。小林（2022）で指摘したように，韓国や中国など多くのアジア圏出身の学生たちは欧米英語圏での学位習得を目指している。「ネイティブ（ライク）英語」を話すことはそうした留学経験者であることの証であり，エリートたちにとっては不可欠な能力である。こうしたアジア人ビジネスパーソンたちの高い英語力に触れることで，日本人ビジネスパーソンたちが世界レベルでの英語格差を認識し，「ネイティブ英語」志向を保持し続ける可能性はある。この場合，World Englishes，English as a Lingua Franca，English as an International Languageを推奨するGlobal Englishes研究者と教育者たちにとって大きな課題となる。いくら脱「ネイティブ英語」志向を説き，そうした授業を実践したとしても，世界のビジネスシーンで「ネイティブ英語」のステータスが最も高いと（再）認識することとなるビジネスパーソンたちにとっては，そうしたGlobal Englishes概念や実践は一時的にしか受け入れない可能性は高い。
または，職場で外国人クライアントと英語でコミュニケーションする機会は限定的であり，学生の頃から持っている「ネイティブ英語」志向がそのまま維持されている，という可能性もある。本調査の回答者のうち，「仕事で今必要だから」フィリピン人講師によるオンライン英会話レッスンを受講していると回答した人たちの割合は，全体では33%，男性回答者群では

55.6%，女性回答者群では14.5%であった。逆に考えると，男性の間でも半数近く，女性の間では８割以上が現時点では仕事で英語を使う必要がないことになる。仕事で将来使う必要性を感じていない割合も，男性では半数以上（55.6%），女性では７割近く（69.1%）であった。では何故わざわざプライベートの時間に自費で英会話レッスンを受講するのか，というテーマであるが，上述したように男女差がある可能性はある（「趣味」として英会話学習をする女性たちの存在など）。冒頭で指摘したように，非英語圏の日本に浸透している「今の時代，英語は必要」・「いつかは使うはず」という英語イデオロギーの影響を受けている可能性もある。いずれにしろ，Global Englishes研究と実践の対象は大学生など学生である場合がほとんどであるが，社会人を対象とした調査が今後ますます必要であろう。

同時に，初級英語学習者として（のまま）英語学習に投資し続ける日本人社会人たちに関する調査と議論も重要である。本調査の回答者の大半が自主的に自費で，そしてプライベートな時間にフィリピン人によるオンランレッスンを受講していた。そして，自分（たち）の英語レベルが高くないからこそ，フィリピン人によるオンランレッスンが合っている，と認識していた。つまり，英語力の低い（と認識している）日本人社会人たちが多くいるからこそ，企業や社会人向けのフィリピン人によるオンランレッスンビジネスへのニーズがある。こうした企業や社会人の存在は日本社会に特有のものであろう。上記そして小林（2022）でも指摘したように，中国や韓国を含め世界の多くの学生たちはいつまでも英語学習者のままではない。少なくとも社会人としてホワイトカラー・エリート職に就職する者たちはその時点で英語使用者となっている。企業側も欧米での大学機関からの学位取得と英語力がある人材を率先して雇用している。

本稿はここで日本企業が韓国や中国企業を模倣せよという主張をしたいのではない。そうではなく，英語教育関係者として，初級英語学習者として・のまま，英語学習に投資し続ける日本人社会人たちの存在についてどう考えたらいいのか，という議論の必要性を指摘したい。大学所属の応用言語学者たちにとって，こうした社会人に接する機会は日常的にはなかなかないが，研究活動等を通じて，彼らの置かれた立場や英語観について理解を深めることにより，同じく初級英語学習者である多く生徒・学生たちに対しどのような英語教育を実践すべきかどうか，という議論につながっていくと思われる。

フィリピン人講師による格安の英会話レッスンへの受け止め方

本調査の回答者たちのうち，フィリピン人講師たちを「英語のノンネイティブスピーカー」だと認識しているものたちは少数派であった（16%）。しかし同時に，彼らによるレッスンが格安であることに対して，疑問を感じている回答者はほとんどいなかった。ということは，若い世代の学生たちと社会人たちの場合，フィリピン人講師たちを「ノンネイティブ」ではないと認識する日本人英語学習者たちが増えつつあるとしても，その若い世代がフィリピン人講師たちを欧米英語圏出身たちと全く同じ「ネイティブ」である，と認識しているわけではない。だからこそ，同じオンラインレッスンでも，欧米圏出身者とフィリピン人との間での料金格差が著しいことに疑問を持っていない。つまり，英語「ネイティブ」話者群の階層化を当然とする価値観が浸透している可能性が高い。こうした可能性を追究する調査と同時に，英語「ネイティブ」講師群の階層化に関する議論は今後重要性を増してくるであろう。

では何故日本人英語学習者たちはフィリピン人講師によるオンラインレッスンが格安であることを当然だと思っているのだろうか。本調査参加者たちによる自由記述回答をみると，格安であることを肯定する理由として二つの理由が確認できた。一つ目の理由は，先進国の日本と

比較すると，彼らがフィリピンという物価や人件費の安い国で働く労働者であるため，というものであった。もうひとつの理由は，欧米英語圏出身の講師の話す英語と比較すると，フィリピン人講師たちの話す英語には「訛り」「アクセント」「クセ」などがある，またはそうしたイメージがあるため，というものであった。この二つの理由について考察する際，つまり，フィリピン人講師による格安のオンライン英会話レッスンについて考える際，立ち位置が個人の日本人英語学習者なのか，講師たちを雇用する日本の英会話産業なのか，そうした授業を導入する英語教育関係者なのか，または，講師たち自身なのか，などにより，議論の在り方は当然変わってくる。以下では，日本の英語教育関係者と，そうした授業形態を推奨する企業側から，格安のオンラインレッスンを取り入れた授業の在り方に考えてみたい。

「人件費が安い国だからレッスンが格安で当然」

まず，「人件費が安い国だからレッスンが格安で当然」という理由・見方に対して，英語教育関係者はどのような立場を取ればいいのだろうか。オンライン英会話を正規授業として導入した三田（2014）は，欧米人講師レッスン１回分の料金でフィリピン人講師レッスンは30回受けられる，とした上で，そうしたコストの低い英語の授業は「日本とフィリピンの人件費と為替の差がもたらす「幸運」によって成り立っていることを承知しておくべきであろう」（40頁）と記している。この立場の場合，先進国の日本とそうではないフィリピンという区別をした上で，フィリピン人英語講師というよりもフィリピン人労働者としての見方を重視していることとなる。さらに，前述したように，フィリピン人をオンライン英会話講師として正社員として雇用することで，彼らの生活を支援しているのだ，と公言している企業（QQ English）もあった。こちらも先進国の企業として，そうでない国に住む若者たちに職を提供している，という立場である。いずれも，先進国側に立つ英語教師・英会話企業として，そうではない国に住む若者を英語講師としてよりも労働者として見る見方を優先し，欧米英語圏出身の「ネイティブ」講師による英会話レッスンよりもはるかに低い料金設定で，フィリピン人による英会話レッスンが提供されているという現状を肯定している立場である。

ただし，こうした先進国側の見方は，現地で外国人のために働くフィリピン人英語講師たちの実情を理解したものとは限らない。フィリピンの英語学校に勤務する若い大卒者たちに対するインタビュー調査（Lee , 2021）によると，自分たちの仕事量に見合った報酬を受けていないという認識が多い：「英語学校の給料では生活の出費を当てるのは十分じゃないんだ。」（英語講師を辞め，再度コールセンター業務に戻るThomas, 87頁）；「自分たちの給料は仕事と全然つり合ってないよ」（Ken, 88頁）；「今UP（フィリピン国立大学）出身の講師たちが集まると，なぜ自分たちはまだここに立ち往生（stuck）しているのかって話すんだ」（Ken, 88頁）。なお，オンライン英語講師は英語学校の講師よりも「一般的に」給料は高めであるが，授業のマニュアル化や録画管理のため，「自由度が低く，いつも緊張して授業に臨まなければならないという」と，Leeは調査を振り返っている（2021, 99頁）。

さらに問題なのは，フィリピン人による格安の英会話レッスンを提供・奨励・享受することで，日本における外国人英語講師グループの階層化に加担してしまう，という事実である。外国人英語講師グループ間の経済的格差と階層化は日本中の英語教育現場で深刻化している。表１に示したように，JETプログラム以外の雇用形態で働いているALTたちが決して少数ではない。そしてこうした形態で雇用されているALTたちの中には，多くのフィリピン人が含まれている。JETプログラムへの応募が2014年まで認められなかったこと（杉本・山本，2019：185-186頁）に加え，既に日本に定住しているフィリピン人たちの存在も大きい。彼らは在留

外国人の中で４番目に大きいグループであり，英語話者のグループとしては最大である（出入国在留管理庁，2021）。彼らは自宅から勤務できる直接任用や派遣契約を好む場合が多く，彼らを対象にした研究も発表されている（Stewart, 2020）。もちろん，こうした職の機会を歓迎しているフィリピン人たちも多いはずである。その一方で，彼らが手にする報酬はJET ALTよりも100万円程度低く，社会保険への加入も出来ない（下山 2019）。杉本・山本（2019）は民間から派遣されるフィリピン人ALTの増加について，財政難の自治体の増加を指摘している（185頁）。そうした自治体は高額な費用負担を伴うJETプログラムを通じてALTを採用するのではなく，直接任用や民間の請負会社からの派遣という形態を使うことで経費削減を行っているのである。つまり，フィリピン人を教師としてよりも安価な労働者としての見方を優先しており，彼らへのニーズは「雇用コストの低さ」（185-186頁）に他ならないのである。フィリピン人ALTを生徒たちは「英語の先生」として見ているだろうが（後述），大人たちがそう見ているのかどうかという点には疑問符がつく。

表１：雇用別によるALT（2019年12月１日時点）

	小学校	中学校	高等学校
JETプログラム	19.9%	33.7%	61.2%
労働者派遣契約・請負契約	29.8	37.2	16.2
自治体による直接任用	19.8	19	17.2
その他	30.5	9.9	5.3

データ：文部科学省（2020）「令和元年度「英語教育実施状況調査」概要（18頁）

「訛りのある英語だからレッスンが格安で当然」

では第二番目の，「訛り」のある英語を話すという理由で，フィリピン人英語講師たちによるレッスンが格安であることを肯定する見方について，英語教育関係者はどういう立場を取るべきだろうか。少なくとも，この理由は「（白人）英語ネイティブ話者」イデオロギー・信仰に対峙するGlobal Englishes研究者と教育者たちにとって看過できないものであろう。

いずれも私立女子短期大学での場合であるが，竹下（2017）や瀧野（2018）の実践報告によると，日本人英語教員はフィリピン人英語講師をノンネイティブの「アジアにおける多様な英語」（竹下，2017，45頁）または「共通語としての英語」（瀧野，2018，４頁）を話す話者として位置付けた上で，彼らの授業を導入している。そしてそうした授業を通じ，欧米圏出身者であるネイティブ英語教師だけが英語教師ではないのだ，と生徒・学生たちに気づいてもらうことを目指している。つまり，欧米圏出身の英語ネイティブ講師たちは単数形の「ネイティブ英語」話者であり，フィリピン人「ノンネイティブ」講師たちは複数形の「アジア」・「国際」英語（Englishes）話者，として学生たちに導入することで，そうしたレッスンの共存を図っている。

ただ，国際英語推進派の日本人英語教師たちがその目的を達するがために，「フィリピン人英語講師＝ノンネイティブ」とカテゴリー化しなくてはならないならば，この点はNNEST Movement が長年抱えるジレンマである。つまり，「（白人）英語ネイティブ話者」（NEST）が優遇される英語教育界の中で，差別や排除の対象となりがちの「（非白人）ノンネイティブ英語教師」（NNEST）の地位と声を認めよう・高めようとする場合，前者と後者を二項対立的に位置づけ，「彼ら」「ネイティブ」集団から「私たち」「ノンネイティブ」集団が一方的に差別を受けている，という対立関係に立つことが前提となってしまうのである（Moussu and Llurda 2008）。そうした「ネイティブ」と「ノンネイティブ」という二項対立の図式に陥った

NNEST Movementは結果として，前者である「（白人）英語ネイティブ教師」たちを他者化し，議論や活動から排除してしまっており，「（非白人）ノンネイティブ英語教師」という内輪グループによる排他的な議論と活動の場になってしまっている（という批判が「ネイティブ」グループからなされる）（Rudolph, Selvi and Yazan, 2015）。さらにいくら，フィリピン人英語講師たちが「国際英語」話者であり，欧米圏出身の「ネイティブ」講師と比べても遜色のない，正当な英語講師である，と位置付けたとしても，両者のレッスン料金単価に数十倍の差がある，という現状を容認してしまっている事実を覆すことが出来ない。

フィリピン人英語講師たちの「専門性」への疑問

このように，フィリピン人英語講師たちによるオンライン英会話レッスンを個人英語学習者として受講する場合だけでなく，日本人英語教育関係者がそうしたレッスン受講を奨励する場合，その正当化と意義づけが難しい。さらに関連して考えるべき議論が，フィリピン人講師たちの英語教師としての資格を疑問視した上で，彼らによるレッスンの導入の是非を問うものである。坂井（2018）は業界最大手レアジョブのホームページに掲載されている講師たちの大学在学中の専攻，年齢，勤務年数を調べた上で，講師たちの専門性に疑問を呈している（68頁）。また，尾崎（2016）は自身でオンライン英会話学校10校よりレッスンを受講した体験を踏まえ，多くの講師が英語専攻ではない大学生のアルバイト，元コールセンタースタッフ，そして英語圏移住を目指す現役看護師や理学療法士である，と報告している（221頁）。なお，この「専門性」や「資格」の議論の中に，上記した「訛り」や「アクセント」といった要素が組み込まれている場合が多い。例えば，JETプログラムへの応募者の場合，英語教育経験や英語教師としての資格は求められていない一方で，「現代の標準的な発音，リズム，イントネーションを身に付け」ていることが条件の一つとして明記されている（JETプログラム公式ホームページ）。また，ECCオンラインレッスンのホームページでは，フィリピン人講師たちの「強味」のひとつとして「トレーニングで磨いた美しい発音」を挙げており，それは「全員がECCのネイティブ講師によるトレーニングをクリアしているため」と宣伝している（2022年３月24日現在）。

資格がないから，腰掛仕事としてレッスンを担当しているから，といった理由で，フィリピン人講師によるオンライン英会話レッスンを導入しないという選択肢はもちろんあろう。同じような理由から，1987年以来続いているJETプログラムに対して廃止を求める意見は以前からある。最近の意見として，藤原（2017）は「無資格ALTに300億以上の税金」が使われているとして，「わざわざ無資格の外国の方を学校に呼ぶ必要があるのでしょうか」と疑問を投げかけている。別の立場としては，フィリピン人講師によるオンライン英会話レッスンを導入はするが，相手はプロの英語教師ではないのだから格安のレッスン料金でも当然だ，という見方もあろう。

しかしいずれにしても，オンライン英会話レッスンを担当するフィリピン人たちの「英語教師」としての資格やキャリア問題について議論する際は，同じ英語教育現場に存在する他の「英語教師」たちの資格と専門性について合わせて議論することが必要であろう。久保田（2018）や国内外の多くの英語教育関係者が認識・指摘しているように，「白人英語ネイティブ話者」であることだけで「英語教師」としての職を提供している語学学校や教育機関が世界中に存在している上に，彼らに与えられる報酬はかなり高いものである。さらに，「英語」を担当する日本人教師たちの資格と専門性の在り方についても長年議論され続けている（石田　他2011）。そして，そもそも「英語教師」という職が医学や法律の分野と同じように「資格」を

必要とする専門職としての「キャリア」なのか，単なる「ジョブ」ではないのか，というテーマは長年に渡って議論されている（Johnson, 1997）。

新しい「英語ネイティブ講師」観を抱く若い世代の登場と世代間の差

既に何回か前述しているように，本調査の回答者たちのうち，フィリピン人講師たちを「英語のノンネイティブスピーカー」だと認識しているものたちは少数派であった。「訛り」のある英語話者や「非先進国労働者」という理由から，彼らを欧米英語圏出身者の「英語ネイティブ」講師と区別しているものの，非欧米英語圏出身の講師たちを「ノンネイティブではない」「ネイティブである」という見方をする日本人英語学習者たちが現れている，という結果は興味深い。同じことが，フィリピン人講師によるオンライン英会話を導入した英語教育現場からも報告されている。こうした授業を経験した私立女子短期大学生たちの中には，フィリピン人英語講師を「ネイティブ」であると認識しているものがいた。そして興味深いことに，そうした学生の存在を日本人大学英語教師が想定していなかったのである。

具体的には，フィリピン人講師によるオンライン授業の受講後，「ネイティブの発音とか反応とかが１対１で聞ける」（三田，2014，34頁），「こんなにネイティブの人[8]とお話をする機会がないのでとても貴重な機会だと思います。」（竹下，2019，９頁），といった回答をした学生たちがいた。しかしながら，フィリピン人によるオンライン英会話授業を「アジアにおける多様な英語」（45頁）に触れる機会として位置づけたい担当者は，学生の「ネイティブの人[8]とお話をする機会」というコメントに対し，「もちろんフィリピン人の教員は英語のネイティブスピーカーではないが，このような誤解をしていた学生はほかにも存在した」と書いている（９頁）。同じように瀧野（2018）の場合も，フィリピン人によるオンライン英会話授業を導入した大学英語担当者自身が彼らを「ノンネイティブ」として位置づけており（10頁），そうでない見方をする学生の存在を想定していない。そして，受講生たちの英語観の変化を調べることを目的とした「英語はネイティブと話すほうがいいと思った」という項目への同意が少なかったという数値を踏まえた上で，「講師がノンネイティブであることは否定的にとらえられていなかった」と解釈し，「英語はネイティブから学ぶ必要があるという英語観が薄れた」可能性と「今後の検証」の必要性の言及している（10-11頁）。

「フィリピン人英語講師＝ノンネイティブ」とは異なる英語観を持ち始めている若い世代の登場についてさらなる調査が必要であるが，その登場の背景には，どのような要因があるのだろうか。何よりも中学校や高等学校で働くALT（外国語指導助手）の多様化が考えられる。例えば，JETプログラムの場合，その開始当初，応募資格者は欧米英語圏出身者に限定されていた。しかし，1997年以降，南アフリカ，ジャマイカ，シンガポール，マレーシア，フィリピンなど，いわゆる準英語圏諸国からの応募が認めるようになっている。JETプログラム公式ホームページに掲載された2019年７月１日時点での「JETプログラム参加国」データによると，未だにALTの大半が欧米英語圏出身者で占められているものの，フィリピン（136名）とジャマイカ出身のALT（111名）はアイルランド人の数（105名）を上回っている。そして前述したように，JETプログラムを通じてではない形態で採用されているフィリピン人ALTの割合が増えている。このように，欧米圏出身ではないALTたちと接する機会が珍しくなくなった世代にとって，「英語ネイティブ」講師のイメージも多様化していることが考えられる。実際，JET ALTとして働いた経験のある17名のフィリピン人を対象とした調査結果によると，その多くが日本人英語教師と生徒たちから「ネイティブスピーカー」として受け入れられ，フィリピン人だからと言って英語教師として不適切ではないと思わされるようなことはなかっ

た，と語っている（Fermin, 2020, 322頁）。

このようにALTの多様化が進む中学や高等学校とは対照的に，大学機関では「ネイティブ」英語教師は欧米英語圏出身者が大半を占めている。そのためか，そうした環境で働いている日本人大学英語教師と若い世代の学生たちの間に「ネイティブ」観の差が生まれている可能性がある（「もちろんフィリピン人の教員は英語のネイティブスピーカーではない」竹下，2019，９頁）。

結論

本稿ではフィリピン人講師によるオンライン英会話レッスン受講者たちへの調査結果を踏まえ，彼らの受講動機，経済的制約の有無，フィリピン人講師たちへの見方，格安な料金設定への考えなどについて考察を行った。そして，初級学習者としての・ままの日本人英語学習者の存在，訛りのある英語を話す後進国労働者としてのフィリピン人講師による格安レッスン，「（ノン）ネイティブ」としての彼らへの見方と世代間の差，「ネイティブ」英語教師グループの多様化と階層化などに関して議論を行った。さらに，こうした議論が社会人による自主的英語学習の域に留まらず，日本の英語教育現場の現状に密接に関わっていることを明らかにした。全体として，課題を整理・問題視し，議論していくことに重きを置いたが，前向きに捉えることが出来る側面もあろう。少なくとも，「白人英語ネイティブ」志向が強いと言われる日本社会において，フィリピン人講師によるオンライン英会話レッスンが受け入れられ，彼らを「ネイティブ」である，「ノンネイティブではない」とする若い世代が増えてきている可能性は非常に興味深い。小・中・高・大の教育機関で英語を教える外国人教師の大半が欧米英語圏出身である中で，そうではない講師たち（の授業）をどのように位置づけるのか・考えるのか，というテーマは非常に新しいテーマである。若い世代の間で生まれつつある新しい「フィリピン人英語講師」観，根強い「ネイティブ」志向，周囲の大人たちの間で変わっていない可能性のある「非欧米圏英語話者＝ノンネイティブ」観，フィリピン人講師が提供する（させられている）格安のレッスンを享受する日本の英語教育界の在り方，外国人英語教師の資格問題など，様々な関連する研究テーマがある。今後，フィリピン人講師に対する調査も含め，研究とそれを踏まえた議論が待たれる。

謝辞

本調査は科研費（19K00756）の助成を受けたものである。

参考文献

石田　雅近・久村　研・酒井　志延・神保　尚武（編集）（2011）『英語教師の成長―求められる専門性』大修館書店

小張　順弘（2018）「フィリピンの英語の商品化―現地調査から―」『アジア研究所・アジア研究シリーズ』（亜細亜大学アジア研究所）No. 96, ５-38頁

小林　葉子（2018）「ドラマに登場する「英語で生きたい日本人女性たち」(2)」『岩手大学人文社会科学部紀

要』103, 33-49頁
小林　葉子（2022）「日本人英語学習者による欧米とアセアン（準）英語圏への留学順序と目的」『岩手大学人文社会科学部紀要』110，33-45頁
尾崎　茂（2016）「フィリピンの英語学校に関する調査報告」『拓殖大学 語学研究』135，209-224頁
久保田　竜子（2018）『英語教育幻想』ちくま新書
JETROマニラセンター（2006）『フィリピンコールセンター産業調査報告』３月
https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/05001229/05001229_001_BUP_0.pdf
下山　竜良（2019）「派遣ALT困窮」『北海道新聞朝刊』12月２日
羽井佐　昭彦（2016）「フィリピン英語留学が言語態度に与える影響―日本人学習者を対象としたインタビュー調査から―」『留学交流』62, 5，７-16頁
藤原　康弘（2017）「これからの英語教育の話を続けよう|第１回「無資格指導」はやめよう：「ネイティブ」，イコール語学教師ではない。」『未草』（ひつじ書房ウェブマガジン）12月18日
https://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2017/12/18/letstalk-1/3/
三田　薫（2014）「スカイプ©英会話を活用した短期大学英語授業の試み―フィリピン人講師との１対１のオンライン英会話レッスンを授業に組み込むことによる効果―」『実践女子短期大学紀要』35, 19-43頁
坂井　誠（2018）「日本社会におけるオンライン英会話サービスの現状，有効性，そして課題」『アジア研究所・アジア研究シリーズ』（亜細亜大学アジア研究所）No. 96, 39-84頁
坂本　美枝・半田　純子（2017）「日本人英語学習者へのオンライン会話活動導入に向けたガイドライン策定」『科学研究費助成事業　研究成果報告書』1-6頁
出入国在留管理庁（2021）「令和３年６月現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00017.html
杉本　均・山本　陽葉（2019）「日本におけるフィリピン人外国語指導助手（ALT）の雇用問題－外国青年招致事業（JET）などを中心に－」『京都大学大学院教育学研究科紀要』65, 179-200頁
竹下　裕子（2017）「大学の授業にフィリピン人教員によるオンラインレッスンを導入する意義－実証実験より」『東洋英和女学院大学教職課程研究論集』9, 44-58頁
竹下　裕子（2019）「大学の授業にフィリピン人教員によるオンラインレッスンを導入する意義－本格導入を経て－」『東洋英和女学院大学教職課程研究年報』２-15頁
瀧野　みゆき（2018）「英語の授業に導入したオンライン英会話の 評価・課題・可能性―英語コミュニケーションのアクティブラーニングの試み―」『立教女学院短期大学紀要』50, 1-21頁
文部科学省（2020）「令和元年度「英語教育実施状況調査」概要」
https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf
Lee Jung Eun（2021）『アジアの英語教育産業が形づくるトランスナショナルな移動―メゾ構造としてのフィリピンの韓国系英語学校を中心に―』立命館大学大学院　博士論文
Fermin, Tricia Abigail Santos.（2020）. Profile and motivations of Filipino ALTs in the JET programme: An exploratory study. *The Bulletin of the Graduate School of Josai International University,* 23, 313-328.
Johnson, Bill（1997）. Do EFL teachers have careers? *TESOL Quarterly, 31*（4）, 681-712.
Kobayashi, Yoko（2021）. Japanese English learners' perceptions of Filipino teachers' online English lessons: Implications for Global Englishes research. *RELC Journal. Epub ahead of print*（DOI: 10.1177/00336882211061629），1-14.
Moussu, Lucie and Enric LIurda（2008）. Non-native English-speaking English language teachers: History and research. *Language Teaching, 41*（3），315-348.
Olive, J. A.（2019）. *The New Frontier of Colonialism: Exploring Tourism Rhetoric in the Philippines*（Unpublished master's thesis）. San Francisco State University.
Pal, M., & Buzzanell, P.（2008）. The Indian Call Center Experience: A Case Study in Changing Discourses of Identity, Identification, and Career in a Global Context. *International Journal of Business Communication, 45*（1），31-60.
Rudolph, Nathanael, Ali Fuad Selvi , and Bedrettin Yazan（2015）. Conceptualizing and confronting inequality: Approaches within and new directions for the "NNEST movement". *Critical Inquiry in Language Studies, 12*（1），27-50.
Stewart, A.（2020）. *Language Teacher Recognition: Narratives of Filipino English Teachers in Japan.* Bristol: Multilingual Matters.
Tupas, R.（2019）. Entanglements of colonialism, social class, and *Unequal Englishes. Journal of Sociolinguistics, 23*（5），529-542.